

薬師寺東塔檼銘の研究 II

—解体修理と銘文の背景について—

研究員 廣瀬裕之、漆原徹、遠藤祐介

右下の写真は、薬師寺・東塔前にて(2023 年 12 月)

本論考は、武蔵野大学「しあわせ研究費」採択による上記 3 人の共同研究の成果発表であり、第 7 回目の研究論文である。「中国仏教の日本への受容」というテーマで調査を継続し書道学・歴史学・仏教学から考察を加えてきた。2017・2018・2019 年度は薬師寺の国宝「佛足石」の調査研究を 3 年間、2020・2021 年度は、国宝「佛足跡歌碑」の研究を着手、コロナ禍のため、現地での調査研究が危ぶまれたが時期を検討して訪問、この研究は 2 年間継続。2022 年度からは、国宝「東塔檼銘」の研究に着手。これらの成果は『武蔵野教育学論集』第 4・6・8・10・12・14 号に研究論文として発表してきた。本年度(2023)は、「東塔檼銘」の刻された東塔の全面解体修理に至る経緯と金属部分の特殊な復元作業についてと、国家仏教との関連を中心とした「薬師寺東塔檼銘における薬師信仰の特徴」と題して、中国南朝仏教と日本仏教との関連などを論考した。薬師寺における奈良時代の書刻の調査研究を開始して 7 年目となる。今回、研究のため薬師寺を訪れると大変貴重な同寺蔵の書額などを見せて頂けた。「水煙」と「檼銘」は東塔の高い屋根の頂部にあり、修理等で足場を組んで取り外した時など、よほどのことが無いと見るできない位置にある。これらは地上の堂内に収蔵することとなり、昨年に引

き続き間近で拝見させて頂け、感激と感謝の気持ちで一杯であった。私たちの研究論文をよくお読み頂いておられるとのことで、今回も薬師寺の応接室でいろいろな意見交換ができたことが喜びであった。堂内に入れていただけ東塔檼銘の刻面調査ができ、また、解体修理の完成した東塔の中へも入れて頂け、じっくりと拝見させていただいたご厚意に深く感謝したい。

薬師寺佛足石以後にあたる中世の佛足石探しも大きな研究テーマの一つとして引き続き進めてきたが、今回は新発見は難しく、これまでの研究で得られた成果をまとめることとした。私たちの共同研究は従来の研究を着実に前進させているといえよう。本成果は、『武蔵野教育学論集』第 16 号(2024 年 3 月刊行・武蔵野大学教育学研究所発行)に掲載した。今後も仏教を中心とした文化の研究を更に推し進めていく所存である。

